

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 朝鮮半島における旧日本軍の駐屯地設定と都市形成に関する研究 - 1900 年前後のソウルを中心にして -

(A Study on the Establishment of the former Japanese Military Bases and Urban Formation in Korea : Focusing on Seoul city around 1900)

氏 名 南 龍協

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、1900 年前後において韓国のソウルで展開された旧日本陸軍の駐屯地設定と、駐屯地の周辺地域の形成を明らかにするものである。本論文は 6 章で構成している。

第 1 章では、研究の目的と意義、視点、既往研究の批評と学術上の位置付け、研究方法などを示した。本研究の目的は次の二つである。1) ソウルに設定された日本軍駐屯地の建設の過程や実態、特徴を明らかにし、それを韓国の近代建築史に位置づけ、現存する日本軍駐屯地遺構の保存や活用に対しその情報を提供することである。2) 近代期のソウルの都市形成において、日本軍駐屯地の設定がもたらした周辺地域の形成を明らかにし、それをソウルの近代都市史に位置づけることである。

従来、韓国や日本の近代史研究や軍事史研究から日本軍駐屯地に関わる問題を扱った研究は存在していたが、本研究がこれらと異なるのは、都市史・建築史的視点から日本軍駐屯地の設定とソウルの都市構造の変化との関係を明らかにしたことである。

第 2 章「ソウル城壁内における日本軍駐屯地の設定」では、城壁都市ソウルの城壁内に日本軍駐屯地が設定されていく過程と、それに伴うソウルの都市構造の変化を論じた。

日本軍は、1882 年に締結された済物浦条約に基づいて、ソウルにおける駐兵権を獲得し、当時の朝鮮政府が提供した既存建物を利用して、同年からソウル城壁内の市街地に駐屯した。しかし、当時の日本と朝鮮（韓国）を取り巻く国際情勢などから、日本軍がソウルに永久駐屯地を建設することはできなかった。その後、1902～1904 年にかけて、ソウル城壁内の南山北麓の「筆洞」に歩兵 1 個大隊を収容する小規模の永久駐屯地を建設した。この駐屯地の周辺には、ソウルの開市にともなって 1885 年から多数の日本人商業者が居住していたが、日本軍駐屯地が建設されたことで、さらに多くの日本人が居住する地区となった。その結果、「鐘路」を東西の都市軸として北側と南側が二分されていた既存のソウルの都市構造において、南側の地区の中でも鐘路から離れていた南山の山麓は開市区域の設定以前は人家もまばらで市街地が形成されていなかった地区で

あったが、日本人居留地の形成によって市街地化が進んだ。植民地期には、この地区は日本人の商業活動の中心地となり、大韓民国が成立した後、現在に至るまでこの地はソウルの繁華街の一つとなったことを考え合わせると、この時期の日本軍駐屯地の設定は、ソウルの都市構造の変化と都市形成に大きな影響を与えたといえる。

第3章「ソウル・龍山における日本軍の軍用地設定」では、日露戦争期から植民地支配開始直後の1913年までに建設されたソウル・龍山の陸軍駐屯地について、特にその設定に関する問題を論じた。1904年に日本陸軍がソウルで新たに設定した軍用地は300万坪であったが、これは、当時の日本陸軍が定めていた「軍用地標準面積」に比べて約5.7倍であった。その後、鉄道用地への転換、韓国政府への還付などを経て、最終的に約118万坪となったが、これでも、「軍用地標準面積」の約1.6倍であった。これは、設定した軍用地の中に日本の民間人が居住する市街地を設定することを見越した方法であったことが文献調査から明らかになった。

同時に、従来の研究では論じられなかった龍山での軍用地設定の理由を文献資料などにより明らかにした。1904年、日本陸軍は、「韓国駐劄軍兵營建設方針」を示し、その中で、①既存市街地の外、②鉄道駅に接近できる所、③緩やかな地形である所、④排水施設設置と水道敷設ができる所、という条件を示していた。ソウルの城壁の外側で、この条件に合致した地区が龍山であった。

第4章「ソウル・龍山における日本軍の駐屯地設定と『新龍山』の成立」は、龍山駐屯地の建設過程と同時に進行した周囲の基盤整備を論じた。駐屯地建設にともなって建設された軍用道路の一般供用、駐屯地以外の敷地の民間人への貸下、さらに、日本軍の駐留方法の変更にとまなう多数の陸軍官舎の建設を通じて、駐屯地の西側に市街地が成立し、それが、現在の龍山市街地の基になったことを明らかにした。

第5章「常設2個師団増設以後における龍山駐屯地と『新龍山』の変化」は、陸軍部隊の増設に伴う軍用地の拡張と周辺市街地の変化を論じた。朝鮮駐屯軍の増設にとまなう軍用地の再編により、朝鮮総督府に移管された土地は民間に払下られ、従来陸軍が民間人への貸下げていた土地の払下も始まった。また、陸軍部隊増設にとまなう軍閥家者の人口増加も生じ、それが龍山市街地の発展を呼び起こした。

第6章は結論である。日本軍の永久駐屯地の建設により、次の2点が生じた。1点目、1902-1904年、初めてソウル城壁内に日本軍の永久駐屯地が設けられたことで、ソウル城壁内の南側の市街地化が進み、ソウルの都市構造が大きく変化した。2点目、広大な日本軍駐屯地がソウル城壁の南側に広がる龍山に設けられたことで、「新龍山」と呼ばれる市街地が成立し、後にそこがソウル城壁内の市街地と連続することで、ソウル市街地の拡大を誘発した。また、このようにして成立した新龍山は、陸軍部隊の増設によって建設された軍住宅地を後背地とし、軍用道路で整備された道路網の下で、幹線道路に面して成立した市街地であった。したがって、20世紀初頭の日本軍軍用地設定は、ソウルの都市構造を大きく変化させた要因であった。